

ン彼の機帆船太室は播摩藩で、大和丸は山口県瀬戸内
沖で、神幸丸が種子島でそれれ沈没したところと見
ると、その受け手打撃はか有り深刻であつたようだ。

大正年間から昭和の初めにかけての船の製作過程、造
船の規模、航海の事情など聞いて見るとまことにおもしろ
い。それにして三十年以前から日本産業界の驚異
的躍進不りに眩惑されて、善きにつけ悪しきにつけ過去
を見おぼえぬようにしなくてはならぬ。佐伯周也
の造船所は灘を以てはなく、代後、宮ノ坂で「阪神通」
の運送船は現地で作つたものであつた。また坂ノ浦の本
田造船所社長本田喜太郎氏（七十五）が、五十一年の造船界
にスタートした位置は、岡本田独歩が好んで登つていた
妙見塚の右下に見下される所で、佐伯の位置を占めてい
る。佐伯の町に用を足すのに、船と左がムとする孤島に
ちかひ離では、機帆船時代になるとますます競争におく
れてしまふ。その上水深の浅い灘には大型船は寄港しな
いようになる。こうしたことから灘の造船所は港として
の運命もそう長く続くはずがなかつた。

現在の灘では百九十九トン級（四八乗）の船主は八軒で
すべて大会社の手ヤマトとして灘に住んではいない。
せいぜい百トン級の船が二、三艘か隼人、Kの運送船とな
り阪神方面へ。佐伯湾近くでは砂利採船（五一トンの級）
の二人乗りが五艘ほど働き、外の小舟はあすがは西条等に
使用されている程度である。古く佐伯船運社長木原義夫
氏が佐伯港の一角を鮮台に、外枝の運送を手広く進めて
いるのが、灘の全盛のころと彷彿とさせてくれる現代版
である。木原氏は灘の御出身である。

（この項、終り）

探訪記

佐伯湾を船で巡る

水の子灯台と鶴見半島突岩部の漁村
に吉跡をたずねて

記録 羽 宗 弘
俳句 吉 田 雅 雄

五月の第四日曜日はおいらは荒天、思ひきつて中止し
て延びしたのが六月一日、空はすおやかに晴れおちつて
船で少くには絶好の日和である。

午前八時半駒はすお思いの一行四十名余を乗せて、借
切の守後丸は葛蔭を出た。羽田浦で四人の女性をかえ終
勢四十六名となる。なか／＼の盛況である。ぼるぼると
立川先生、竹田から後藤嘉壽美氏の御参加があり強し
い。会員十六名、その家族四名、豊南高橋生十名、一級
（若くは主）十四名、小学生二名といつたこねまでにお
い願ふれてある。

船はまず最初の目的地底浦につき、池田五長氏の御案内
で急斜面の林の中を登り、海拔百米ほどの崖根を越えて
切支丹寺址を訪ねる。その位置は、ゆるやかな傾斜の小
径を十数米下つたところ、広葉樹の密林で僅かに再履の
方にむかつている方をちかむ窟である。今越して来た崖
根の下は、石垣でも築いたような断崖が樹林の中につづ
き、巾が二十米から三十米程の窪地があり、十二、三年生
の樹林が東北から西南に向つて、凡そ五反歩ばかりの広
さ。東南海に面し九方はちよつと小高い丘がつづいてい
るので沖合からよく見えない由。なるほど隠れキリシ
タンは伝承を生れそうなき、奇妙なところである。地元で
はこゝを「切支丹窟」と呼ぶ、外に伝承は何もないといふ。

それは或はそうである。信賴出来る文獻は何もない。佐藤鶴谷の著書も、増村氏の「佐伯郡土史」も傳説を載せているだけである。何とか実証は出来まいか。何年か後この树林を伐採の時、持主である丹波の神崎家に頼んで、発掘調査することである。何か人の住居していた証跡と、切支丹の遺品遺跡を見つけたらいいのである。

キリシタン窟でふ山の夏木立

長良子

それから一行は山を下つて広瀬へ。池田氏は海岸から二十米ほどはなれた段々島に私共を導いた。そこは終戦後池田氏が管々と開墾した島で、二三年前に植込まれたと思われる栗の幼木が、古ようど花を咲かせ甘い持育のかおりを放つてゐる。その片おきに開墾の際に振り出された墓の古塔が並んでいる。チグハグに重畳で整へていないが、土輪塔をはじめ空塔の一部、層塔、それらの台座と覺しき十数個、いすれも凝灰岩で刻まれていた。かほがしく、梵字が一字あるきり外に文字は認められな。ここは寺屋敷と呼ばれてゐるという。

切支丹窟といふ、この寺屋敷の古塔の群といひ、この戸敷僅かに十数戸の辺鄙な漁村に、空塔も層塔もあるのはなべてである。この二ヶ所にはきつとつながりがあると思ふ。

何時の代の塔かは知らぬ栗のノ花

長良子

浜におりて午後九に乘る。折から船が乃しとすまじ左ばかりの新造船が、萬船飾ではいつて来てみんなにお祝いの旗が餅をくばる。そして私共の船より先には、海風にはためかしつゝ出て行く。さすかには無の人達である、まことに景気ないい話である。

船日丹波 寄水手 豊後水造

板寄へハコ
イスを度更し
て水の子灯台へ
と向かう。これは
今朝葛巻で私共を迎
えてくれた大島古川
高長の「午後風が出
る。水の子は午前中か
よい」との示唆にもと
づくもの。

豊後水道をばるが彼
方、かすんで見ゆる
水の子灯台、この見
浮が又今日の一つの
ポイントであつた。

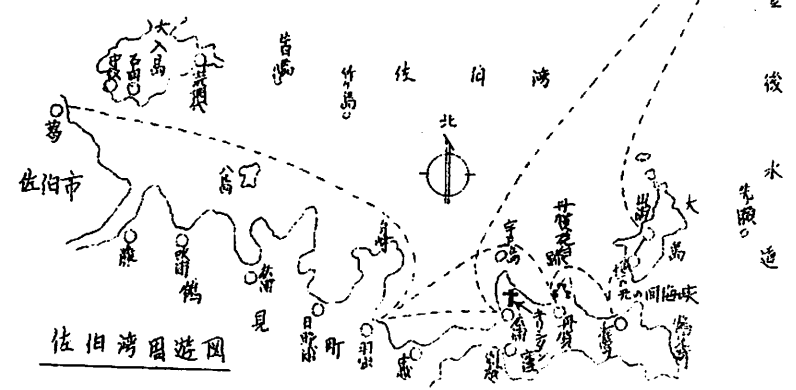
六月の風航く
航跡光らせて
水の子の見えぬて
遠し 卯月湖

長良子

よく風いだ海は陽に光り、船は快適にエンジンの音も響く。一同の胸ははずか。然しなにしろ大島からで
も十四舟の沖、豊後水道のまん中である。そろそろ空
腹も覚えるころ灯台の姿は遠々と大きく近づき、正午
少し前目指す水の子灯台の岩礁南側に船がついた。

六月のあまの瀬濁の紺真澄 長良子

水の子島は天がここに灯台と造らせる左にあげわ



ざこしらえてくれたような洋土の狐島、まわりが三百米ばかりある岩礁である。海留から六十米のこの灯台は、明治三十七年の築造になるというから既に六十数年の歴史ともち、過ぐる大戦中には歳々の徹銃掃射をうけたという、その障痕を横に見ながら、灯台を訪れる。

私は特に頼んで灯台の中を見せていさぐ、鉄の階段をのり、九階の最上層、百三十万カンテラの灯のついた一おどろいど灯台を見て下される。一とこまで全島を照らす。十秒間に一回点滅する電燈、回転する光線レンズの物々しき。灯台頭の方が一々説明して下さり、次々價向をたどって救えてくれる。

灯台の外に出て見る。ほろかに四国の日輪島や山が見える。一船の色船が一本釣をうけている。眼の下は海留まで六十米、足はすくむ思ひであるが、すぐ馴れてよく見る。大きな鯨の大群が、灯台の北側岩礁と少しはなれ九海中をまっ黒になつて回遊している。時々腹を白く光らせてガタガタのスピードで輪になつて落ちていく。みんな息をころころ見入る。

全く時が九つを忘れてしまつてであるが、時計は一時にたろうといている。みんなを促して私は灯台を下りた。

みんな大満足で、来てよかつた、いゝものを見た、すばらしい今日の水の不見落しと顔をかかかかして船に戻つた。

船はまっ直ぐ大島に向つて走る。さう昼食の升当を聞くと、私は船室にもテツキにも陽が陽ち、実に楽しい。少し風が出て波が立つ、然しもう馴れてしまつたが船よにもなく、午後二時半大島田原浦の漁港につく。

天草と干し大島の舟着場 長良子

ここへは旧知を訪ねるも、磯に下りて貝を拾うもの、神社を九つあるも、早目に海岸道路を登りて地下に急ぐも、一とこはくばらくなる。一部は会員は神社を横に漁村から及床

中標を見つける。大島南麓の社は地下の神崎氏ということにまつているが、成長する南麓祖高政の命に、大島を南拓した「農市兵衛」は田野浦ではないかと疑つて見ない。耕して天に至るその段々島には表を削る左後いものや、か用意されて、大島イノ達の勤勉さを物説っている。

地下でもハラノとを、私はか茂神社にまいる社頭、この大樹に、おどろく、くおしい調査は後日にゆずる。

船は地下から元の間海峽を横切つて機寄へ。ここには漁協の井上氏が案内して下さる。鶴崎神社に上輪さん一流入り墓一真言宗のお寺一境内の大きな御影石の立輪塔と、見たり聞いたり、一時に下機寄の長富我輩は連なる物語。ここにも歴史があり、伝承物語があるここがわかつた。今日最後の地耳質では、小林氏の御案内を得て、丹原栗原(砲台)とくまなく見落、蟹槍の悲話に心を打たれる。

夏草や振ぐる砲台悲話の跡 長良子

頂上に出る。まことにすばらしい景観。宇戸島、切文丹壺、猪垣、鶴見崎、元の間海峽、大島、小間高寺の島の彼方の豊後水道。そして北方にふいと伸びて突出する蒲戸半島が、この鶴見半島と括くようにしてはいる佐伯湾の廣々と一左海面。三百六十度の展望を一目に、いよいよ出来る、今日第一等の景観である。

船からしきりに帰りの催促の汽笛が鳴る。

午後五時半船は帰路につく。船中で大島古川島長氏から頂戴のビールで、我れも吹つと下、船室では歌やおどりが賑やかになる。そんな口々に今日の見学のよかつたこと、おびと、語り出す。全く鶴見の方々の御配慮のおかげで感謝しつつ、七時前葛城に帰着解散した。